毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

巡回ワークショップ　@宮城・山元　花釜地区

避難支援 協議続け模索

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は昨年12月13日、巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県山元町の花釜地区で開いた。東北以外の開催を含め通算50回目。花釜では2012年12月にもむすび塾を実施。節目に合わせて、初めて同じ地区で2回目を開いた。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長の進行で、住民ら11人がその後の取り組みや避難の課題について意見を交わした。

要援護者の災害対策

前回の開催を契機に、地域では住民有志が要援護者の避難支援や安否確認の方法を話し合っている。行政区副区長の菊地慎一郎さん(68)は「寝たきりなど体の不自由な住民は今後増える。若い世代が働きに出ている昼間の避難態勢が問題だ」と懸念した。

福祉施設職員の丹治恵里奈さん㊱は「災害時は職員の安全を優先し、利用者の送り迎えをしないと決めている介護施設が増えている」と現状を紹介。震災被災地で施設職員が要援護者を助けようとして犠牲になった例があったことを踏まえ、地域で対応する必要性に言及した。

要援護者を支援する担当者を事前に決めるか否かをめぐっては、参加者の見解が分かれた。

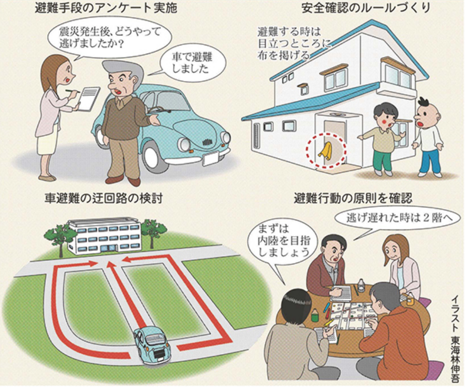
前回参加した住民を中心に、東北大災害科学国際研究所の研究者の協力を得て、車避難の在り方も検討している。

要援護者の移動に不可欠との理由で車避難を推す声が上がった一方、「災害直後の道路状況が分からないのに車を出すのは疑問」と慎重な意見も出た。主婦の武田あき子さん(80)は、心配される渋滞を緩和する方法として「（行政と相談して）緊急時は反対車線も使って避難する決まりにしてはどうか」と提案した。

震災の発生から3月11日で5年になる。町臨時職員の下山司さん(65)は発生直後との心境の変化に触れ、「備蓄の食料や薬を使ったら買い足すべきなのに、最近は自分でも忘れがち。防災意識が薄れてきている」と自戒するように話した。

木村理事長は、住民が継続して防災・減災対策の見直しに取り組んでいる点をたたえた上で、「残っているのはすぐに答えが出ない問題ばかりだ。決定打が出なくても地域で話し合いを続け、住民の合意形成を進めてほしい」と助言した。

前回むすび塾後の花釜地区の住民の取り組み


避難手段のアンケート実施
震災発生後、どうやって逃げましたか?
車で避難しました
安全確認のルールづくり
避難する時は目立つところに布を掲げる
車避難の迂回路の検討
避難行動の原則を確認
逃げ遅れた時は２階へ
まずは内陸を目指しましょう
イラスト　東海林伸吾

前回むすび塾開催後の地域の取り組みや課題を話す参加者

■むすび塾に参加して ―― 宮城・山元 花釜地区

【震災の教訓】とにかくいち早く逃げる。戸締まりなど考えていたら命はない。各部屋に懐中電灯を置いて備えている。
＝花釜行政区長・岩佐年明さん(70)

【要援護者の避難】福祉事業所の中には、津波警報が出たら利用者の送迎をしないと決めたところもある。難しい問題だ。
＝ケアマネジャー・丹治恵里奈さん㊱

【緊急時の不安】訓練をしても、実際にはどんな行動を取れるか自信がない。災害は千差万別と心がけるしかない。
＝山元町臨時職員・下山司さん(65)

【緊急時の備え】前回のむすび塾をきっかけに班単位で話し合いを始めた。要援護者の避難のことなどを相談している。
＝主婦・菊地次子さん(67)

【緊急時の備え】デジタル音声の防災無線は聞き取りにくい。昔の火の見やぐらのような設備を作り、鐘を鳴らしてはどうか。
＝主婦・武田あき子さん(80)

【緊急時の備え】震災時は車のガソリンが空の状態で困った。今はメーターが半分になったらすぐに給油して満タンにしている。
＝無職・丹治正幸さん(62)

【参加して】皆さんの話を聞き、まずは自分の命を守ること、周りの人の命を助けることの大切さをあらためて感じた。
＝主婦・下山志津子さん(62)

【参加して】前回のむすび塾開催で地域の話し合いが進み、共助の意識も芽生えてきた。安心して住める地域にしていきたい。
＝無職・田代侃さん(77)

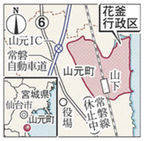
【緊急時の備え】車での避難を考えているが、緊急時は渋滞が予想される。基本のコースを決め、う回路も把握している。
＝会社員・小林光男さん(63)

【緊急時の備え】家族と、それぞれ安全な場所に避難するよう話し合っている。連絡が付かなくても元気でいたら必ず会える。
＝主婦・丹治陽子さん(60)

【緊急時の不安】若い世代は平日の日中、仕事で不在だ。内陸から救助に来させたくない。要援護者をどう避難させたらよいか悩む。
＝花釜行政区副区長・菊地慎一郎さん(68)

前回以降 研究者と課題検証

花釜地区



花釜行政区は町北部の沿岸からJR旧山下駅を含む内陸にかけてのエリア。高台には最長で約3㌔ある。約1000世帯の大半が津波で建物被害を受け、146人が犠牲になった。

震災後、災害危険区域に指定されたが、内陸寄りの地域は住宅再建が認められた。現在の世帯数は518。

2012年12月のむすび塾には、住民10人が参加した。80代の1人暮らしの女性は「車がないので、震災当日は自宅2階に逃げるしかなかった」と振り返った。発生後、内陸への主要道路が混雑したため、車避難の課題も共有。参加者は日常の交流と、避難時の連携を誓い合った。

翌年3月、住民たちは現地再建した230世帯を対象に避難行動を調査。震災では9割が避難に車を使っていて、渋滞対策の重要性が浮き彫りになった。

参加住民を中心に毎年、町総合防災訓練で車避難を試みた後、反省会を開いている。東北大災害科学国際研究所の研究者と車避難の課題を検証し、安否確認、要援護者支援のルール作りにも取り組む。

いのちと地域を守る

濁流逃げ切れず屋根に

山方向の道路 拡幅要望を

防災・減災のページ

手段と経路 地域で共有

「逃げる」教育が大切

2012年12月に実施したむすび塾の特集紙面

■専門家から

普段から意識 必要

減災・復興支援機構 理事長　木村 拓郎さん

宮城県山元町花釜地区の住民は前回のむすび塾以降、防災に関する議論や訓練を重ねてきた。要援護者支援という難問に直面しているのは、課題の掘り下げと問題意識の共有が進んだからこそだ。

普段から意識しないと、緊急時に行動するのは難しい。

避難に使える時間は少ない。一人一人で逃げるにしろ、近所の高齢者らを助けに行くにしろ、地域である程度の合意をしておくことが必要だ。

車避難は一本の道に集中すると渋滞の危険が高まる。基本の避難ルートを幾つか設定し、住民を分散させるといいのではないか。

防災対策は震災直後に万全でも、時間がたつと粗が出てくる。基本原則を再確認し、周知してほしい。

パターン考え対応

花釜地区は普段から話し合いができていて、備えも進んでいると感じる。

それでもきょうの話し合いで、防災対策についての認識の違いや、まだ意見のまとまらないことがあることが分かった。話し合いを続けてほしい。

災害はいつも同じではなく、緊急時の対応が不安だという話もあった。雨や雪などの気象条件、深夜の発生などいろいろなパターンを考えて備えておくことが大切だ。

備蓄食料は訓練時にみんなで食べてはどうか。訓練を楽しめるし、備蓄品の確認や買い替えにつながる。

減災・復興支援機構 専務理事　宮下　加奈さん

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は巡回ワークショップ「むすび塾」を2012年5月に始めました。町内会、学校、職場などで開催してます。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回のむすび塾は24日、石巻市八幡町で開きます。